

三津屋古墳(北群馬郡吉岡町)

三津屋古墳への行き先表示板(右手)を発見



その方向に進むと一寸した駐車場があり、そこに説明坂があった(正面)



群馬県歴史遺跡

三津屋古城

場所 群馬県北群馬郡三津野大字三津野三丁目一番地
指定年月日 平成七年一月十四日 正門指定 平成十二年二月二十二日

本古墳は、中世に築かれたもので、第一・八角形墳である。

墳丘は、築造後、石を積み重ね、その外周は順次内側に、第一・八角形墳、第二・八角形墳、第三・八角形墳、第四・八角形墳、第五・八角形墳の順に、四方をめぐって築かれ、第一・八角形墳が中心となることと思われる。築造年代は、築造後、石を積み重ね、その外周は順次内側に、第一・八角形墳、第二・八角形墳、第三・八角形墳、第四・八角形墳、第五・八角形墳の順に、四方をめぐって築かれ、第一・八角形墳が中心となることと思われる。

八角形墳の中心には、石を積み重ね、その外周は順次内側に、第一・八角形墳、第二・八角形墳、第三・八角形墳、第四・八角形墳、第五・八角形墳の順に、四方をめぐって築かれ、第一・八角形墳が中心となることと思われる。築造年代は、築造後、石を積み重ね、その外周は順次内側に、第一・八角形墳、第二・八角形墳、第三・八角形墳、第四・八角形墳、第五・八角形墳の順に、四方をめぐって築かれ、第一・八角形墳が中心となることと思われる。

八角形墳の中心には、石を積み重ね、その外周は順次内側に、第一・八角形墳、第二・八角形墳、第三・八角形墳、第四・八角形墳、第五・八角形墳の順に、四方をめぐって築かれ、第一・八角形墳が中心となることと思われる。築造年代は、築造後、石を積み重ね、その外周は順次内側に、第一・八角形墳、第二・八角形墳、第三・八角形墳、第四・八角形墳、第五・八角形墳の順に、四方をめぐって築かれ、第一・八角形墳が中心となることと思われる。

八角形墳の中心には、石を積み重ね、その外周は順次内側に、第一・八角形墳、第二・八角形墳、第三・八角形墳、第四・八角形墳、第五・八角形墳の順に、四方をめぐって築かれ、第一・八角形墳が中心となることと思われる。築造年代は、築造後、石を積み重ね、その外周は順次内側に、第一・八角形墳、第二・八角形墳、第三・八角形墳、第四・八角形墳、第五・八角形墳の順に、四方をめぐって築かれ、第一・八角形墳が中心となることと思われる。

平成二十二年七月

群馬県教育委員会
吉岡町教育委員会



群馬県指定史跡

三津屋古墳

場所 群馬県北群馬郡吉岡町大字大久保字三津屋二〇三七―一 番地他
指定年月日 平成七年三月二十四日 追加指定 平成十三年三月二十三日

本古墳は、全国でも極めて数の少ない（正）八角形墳である。

墳丘は二段築成で周堀を持ち、その規模は墳丘対角間で二十三・八m、残存高四・五mである。八角形の一边の大きさは、下段で約九・〇m、上段で約六・〇mを有する。墳丘の企画設計に当たっては唐尺（一尺≒三〇cm）が使用されたことが推測される。墳丘下段の縁辺部には列石が配され、上段は扁平な川原石で丹念に葺かれている。

石室は破壊されていたが、奥壁石や側壁根石の抜き取り跡から、一部切石を用いた自然石乱石積の横穴式石室であったと思われる。副葬品は盗掘により発見できなかった。

八角形の企画は、玄室奥壁を中心として石室主軸をほぼ真北に向け、八等分している。

古墳の年代は、八角形の墳丘構造、石室の特徴等から七世紀後半と考えられる。

八角形墳の存在は、七世紀中頃から八世紀初頭にかけての畿内地方の天皇陵古墳、あるいはそれに準ずる古墳に代表される。ただし、これらの多くは発掘調査により、本来の姿が確認されたわけではない。その意味でも八角形の墳丘形態が確認できた三津屋古墳の資料的価値は極めて高い。

本古墳は、調査時の葺石・列石・盛土を一部修復し、欠失部分は調査結果から復元した。また、古墳内部見学施設は、石室根石状況ならびに土層断面を発掘調査時のまま展示した。

平成二十一年十二月

群馬県教育委員会
吉岡町教育委員会

石室の状況



その向こうを見ると三津屋古墳があった



これが正八角形の三津屋古墳/二段築成/7世紀後半の築造



墳丘に近づいてみよう/北側から見たところ



墳丘下段の縁辺部には列石が配され、上段は扁平な川原石で丹念に葺かれている/墳丘の周囲には周堀が巡る/西側から見たところ



南側に回ると石室入口がある



左手を見たところ



右手を見たところ



それでは石室内部へ入ってみよう



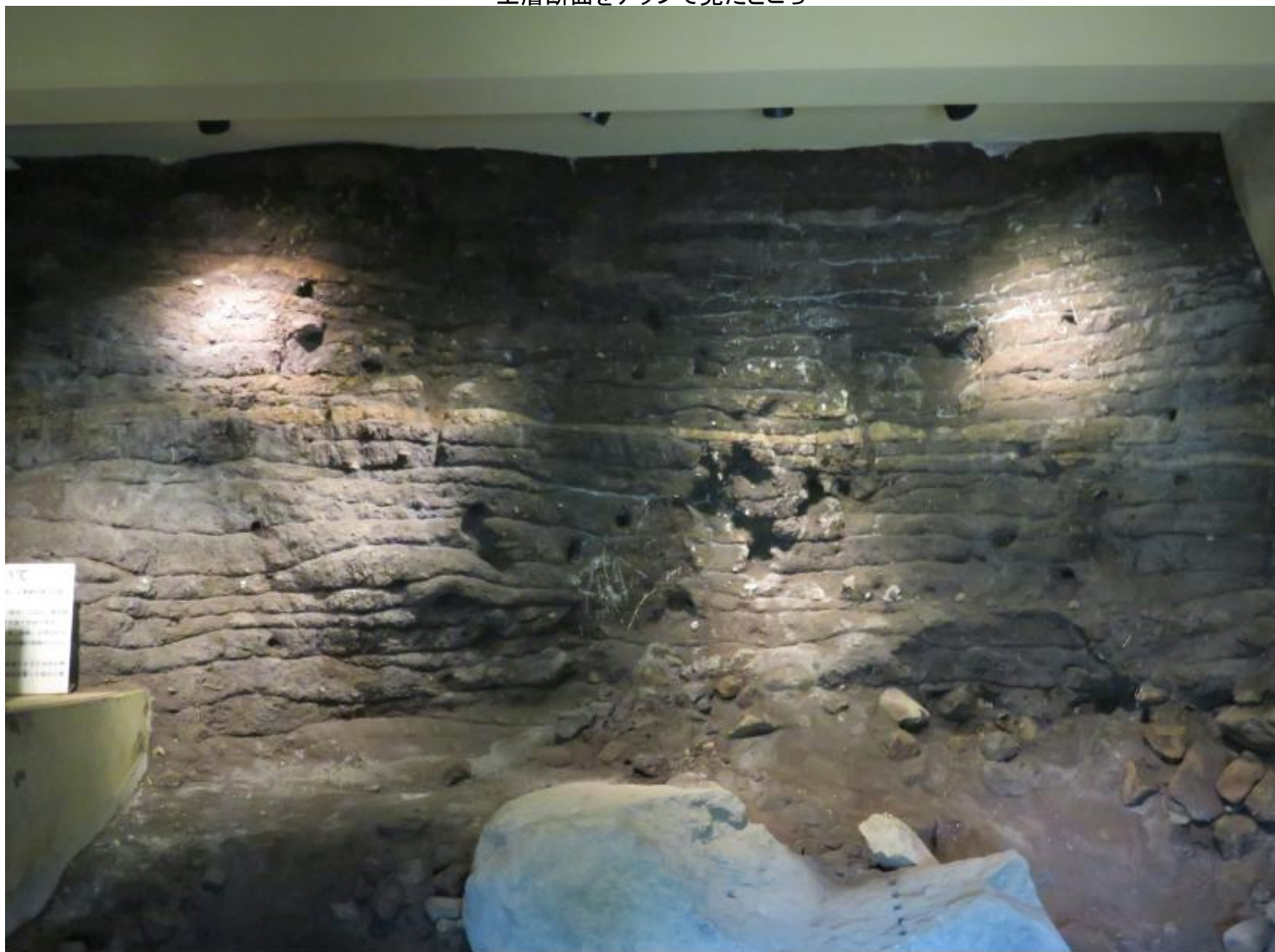


古墳内部見学施設は、石室根石状況ならびに土層断面を発掘調査時のまま展示している





土層断面をアップで見たところ



土層について

古墳の盛土は本来見ることはできませんが、三津屋古墳では盛土断面をそのまま展示しています。

盛土は、10～20cmほどの厚さで横縞状（板状）になり、搗き固めながらいねいに土を積み上げている様子が良くわかります。

この積み方は、寺院の建物基壇などに用いる「版築」と呼ばれる工法によく似たもので、通常ほんこの古墳と異なる本古墳の特徴の一つになっています。

土層の上部にある灰色の土は盛土のしまりを良くする工夫かと考えられ、また中ほどにある黄色の土は石室天井石を覆った粘土と考えられます。

根石の状況



左手から右手を見たところ

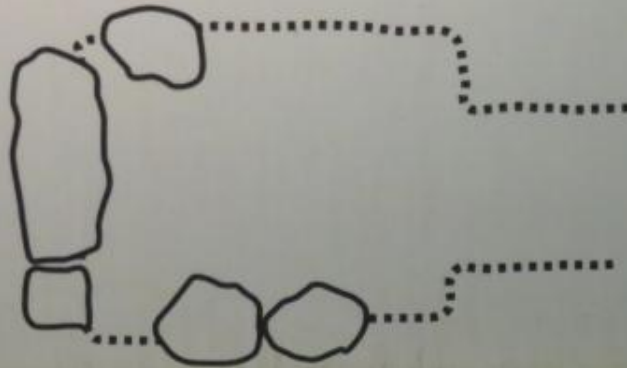


さまざまな説明板が貼ってある



石室

残っていたのは石室の奥壁と側壁を構成していた根石の一部とその裏込め石で、他の石はすべて持ち去られていました。しかし、石を抜き取った跡に残る窪みなどから、本来は一部に切石を用いた自然石主体の横穴式石室だったと考えられます。奥壁部分に残った大きな石には割って持ち出そうとした傷跡が認められます。





上段墳丘は扁平な川原石で葺かれ、八角形の角は大きな川原石を積み上げることで八角形を強調している。



古墳の盛土は版築はんちく様の工法で、10~20cmの厚さで土をつき固めながら仕上げている。

唐尺が用いられていると云う



八角形の企画は玄室奥壁を中心として
八等分している。

石室内から入口を見たところ



少し退いて南側から見たところ



そこからアップで見たところ



さて、これはその近くから北西方向を見たところで、前方は榛名山



アップで見たところ



これは同じく北東方向を見たところで、前方は赤城山





三津屋古墳

本古墳は全国でも極めて珍しい正八角形墳である。墳丘は二段築成で周壁を持ち、その規模は墳丘対角間約23.8m、残存高約4.5mである。八角形の一边の大きさは下段で約9m、上段で約6mあり、墳丘の設計には唐尺（1尺≒30cm）が使用されたと推定される。墳丘下段には山石の貫石が配され、上段は扁平な川原石で精巧に葺かれている。八角形の中心は玄室奥壁中央で、石室主軸をほぼ真北に向け八等分している。

石室は破壊されていたが、奥壁石や側壁根石の抜き取り跡から一部切石を用いた自然石乱石積の横穴式石室であったと思われる。副葬品は盗掘をうけたため残っていなかった。

古墳の年代は墳丘構造や石室の様子から7世紀後半と考えられる。

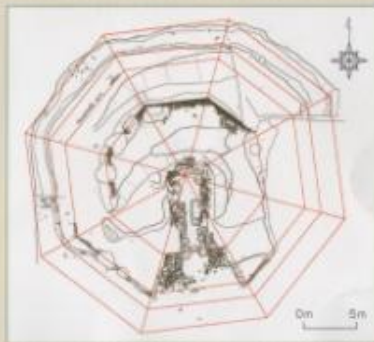
八角形墳は7世紀中頃から8世紀初頭にかけての畿内地方の天皇陵古墳などに代表されるが、発掘調査で本来の姿が確認されたわけではない。そうした意味でも全貌のわかった三津屋古墳の資料的価値は非常に高い。



八角形の角を強調した上段墳丘の貫石（調査中）



発事に積み上げられた墳丘盛土（調査中）



古墳平面図



見学室内への入室はAM8:30～PM5:00まで

●問い合わせ先
群馬県北群馬郡吉岡町下野田560
TEL 0279-54-3111
(文化財事務所 TEL 0279-54-9443)
吉岡町教育委員会

群馬県指定史跡

三津屋古墳

復元された八角形墳



参考ホームページ

http://sgkohun.world.coocan.jp/archive/index.php/yosioka_mituya/

<http://jomokrtphoto.blog.fc2.com/blog-entry-177.html>

<http://kofunnomori.web.fc2.com/gunma/yoshioka/mitu.htm>

https://blogs.yahoo.co.jp/haniwaproject/70232790.html?_yosp=5LiJ5rSI5bGL5Y%2Bk5aKz77yI5YyX576k6aas6YOh5ZCJ5bKh55S677yJ

<http://www.群馬b級スポット.com/yo3.html>

